

年の始めに思う年中行事の重要さ

年末年始には、除夜の鐘から成人式までさまざまな年中行事が集中している。日本人が新年に当たり、心身の健康や家族・社会との関係に想いを馳せ、奮いを新たにしてきたことを表している。

岸田文雄首相も年頭記者会見で「先送りできない問題」に挑戦するの宣言し、防衛力強化などいくつかの重要課題を挙げた。他方、人類全体も先送りの許されない課題を抱えたまま越年した。温暖化、感染症、ロシアのウクライナ侵攻に続く国際関係の乱れなど。何故人類は繁栄の陰でこれほど深刻な問題を先送りしてきたのか。こんなことで大丈夫なのか。

文明崩壊の共通項

『文明はなぜ崩壊するのか』の著者のレベッカ・コスタは、過去の文明崩壊には共通項があるという。文明の進歩がもたらす課題の複雑さと変化の速度に脳の能力が追い付かず、その結果解決が先送りにされること、そしてその場凌ぎの対症療法を繰り返すうちに、対処できていると思いついてしまっていることだ。この間に夫々の問題は

悪化し続け、一つの出来事が引き金となって全体が崩壊する。

ローマ帝国は農業生産の減少、人口増加、統治の乱れ、過信による想像力の欠如などフン族の侵略の前に崩壊の条件が揃っていた。上述した現代の問題も、その奥には産業技術による自然破壊、成長最優先の経済の下での格差拡大、宗教や民族の抗争など多くの問題が複雑に絡み合っており、いかなる専門知もそれだけで解を見つげられずに、先送りされてきた。

正論



元文化庁長官 近藤 誠一

し、理性が司る合理的思考は後回しにしてしまつからだ。

自然観と共感力の重要性

われわれもこれまでの文明の轍を踏むのか。それとも最新のAIが問題解決への最適解を見つけてくれるのだろうか。問題の根源に非合理的な人間性や情動があり、目標も変わり続けることを考える。と楽観的にはなれない。コスタが指摘しているように、脳は目の前の危機回避のために感情を点火して素早く行動する生存本能を優先

し、理性が司る合理的思考は後回しにしてしまつからだ。自然や生命の本質を十分に解明できず、経済成長のための資源と捉え、大量消費を止められない。自然を理解するにはこの思想を転換し、人間は自然の一部で、自然はその「内」から直観的に理解すべきものという発想を広げねばならない(伊東俊太郎『近代科学の源流』)。そこで注目されるのが日本の伝統的思想・文化には、自然との深い関係性の認識が内在することだ。アインシュタインも訪日した際にこのことを感じた。中でも日本人に愛され、自然を

日々の生活に浸透させてきたのが年中行事である。この年末年始では、デジタル・ネイティブと言われる若い人たちはどの程度伝統行事に参加したのだろうか。大掃除はロボットの掃除機に任せ、初詣では参拝よりインスタグラム撮りが重要となり、年賀状はSNSでの「あけおめ」という略語で済ませ、プラスチックの松飾りやおせち、七草がゆをコンビニで買って済ませたのかもしれない。いずれも時間と手間とコストを効率化してしまつたに違いない。失われるものがある。自然や生命への畏敬の念、謙虚さ、季節の移ろいの感動、先祖や家族への想いなど日本人としての誇りやアイデンティティーの再確認の機会だ。それだけの犠牲を払う対価として彼らは何を求めるのだろうか。

年中行事の世界への拡散を

今後問題解決の武器となるであろうAIを人間として適切に使いこなす上で、若い人たちに日本の文化を日々感じ、自分は自然の一部だとの感覚をもつ環境を意識的に提供すべきだ。わずかな努力で、自然の生態系と親和性のある生活習慣、教訓(「三方良し」)や諺(「足るを知る」)を社会に取り戻すことができる。そうした生活スタイルは外国人にとって日本の新たな魅力となるであろう。それは技術による欲望の無限なき追求という野望を牽制し、自然の循環の中で生きることを「クール」と感じる風潮を生むだろう。同時に日々文化に親しむことは立場や国境を超えた共感力の強化、それによる団結力の向上につながる。200万年前に人類が絶滅の危機から逃れ進化できた一つの鍵が群の拡大であったが、それを可能にしたのが共感力の発達だ。共食や音楽などの文化の共有体験を通して、他の群への警戒心を乗り越えることを学んだ。それは、ミラーニューロンという脳細胞の進化によって可能となった。日本の伝統文化の地道な伝道こそが直面する複雑な問題の本質的解決に資する。長い時間がかかること、効果が出る保証がないこと「先送り」の口実ではない。(こんどう せいいち)